

令和2（2020）年度
施設コンサルテーション事業
事業実施報告書

京都市発達障害者支援センター“かがやき”

はじめに

京都市発達障害者支援センター“かがやき”は、社会福祉法人京都総合福祉協会が京都市から委託を受け、平成 17（2005）年に開所し 15 年目を迎えました。この間、関係各法に発達障害が位置付けられ、発達障害児者に対する施策が充実しつつあります。当センターでも、普及啓発事業やケースを通して各機関・事業所と連携しながら、正しい知識に基づく適切な支援を拡げることを目指してまいりました。

このような間接支援の一環として、当センターでは、地域の支援力の向上を目指し、平成 30（2018）年度後期より、施設コンサルテーション事業を実施しています。当事業では、行動障害等の相談に対し、事業所への訪問・連絡等により、対象者のアセスメント・支援を事業所と協働で行い、問題行動の軽減や安定した施設生活につなげるサポートを行います。また、この事業を通して、事業所全体の発達障害のある利用者への特性理解や支援力の向上や、事業所職員がアセスメントから支援につなげる PLAN-DO-SEE のプロセスを行えるようになることを目指します。令和元（2019）年度までは試行期間として、法人内事業所を対象に実施し、事業のシステム作りに取り組んでまいりました。

そして令和 2（2020）年度より、当事業は、京都市内の福祉サービス事業所に対して広く周知し、成人期の発達障害の方々の支援をされている施設を対象に、本格的に開始となりました。令和 2 年度の実施事業所の中には、1 年間の事業の後も、PLAN-DO-SEE の取り組みを続けられた事業所もあります。その報告もふくめてまとめたものが、本実践報告書です。この報告書が、発達障害の方々の支援をされている皆様にとって「理解や気づき」となり、「できる」力につながることを願っております。

末筆ではございますが、各実施事業所の皆様には施設コンサルテーション事業に対してご理解をいただき、熱い思いで取り組んでくださったことに感謝いたします。

令和 4（2022）年 3 月
京都市発達障害者支援センター“かがやき”

令和2（2020）年度

施設コンサルテーション事業 実施事業所（50音順）

《研修コース》

- ・ デイサービス音希（特定非営利活動法人 音希）
- ・ デイサービスはあとの会（特定非営利活動法人 障がい者はあとの会）

《アセスメントコース》

- ・ 京都市山科障害者デイサービスセンター（社会福祉法人 京都障害者福祉センター）
- ・ 京都市洛西ふれあいの里更生園（社会福祉法人 京都総合福祉協会）*
- ・ 工房あすく（特定非営利活動法人 あすく）*
- ・ 生活介護事業所コスモス（社会福祉法人 京都総合福祉協会）**
- ・ 七彩の風（社会福祉法人 幸の会）

* 対象者本人・家族の希望により、かがやきホームページでは非公開

** 対象者本人・家族の希望により、かがやきホームページおよび報告書冊子では非公開

デイサービス 音希（特定非営利活動法人 音希）

〒603-8415 京都市北区紫竹西大門町 29-1

TEL 075-494-0077 FAX 075-494-0066



◆ 実施コース 研修コース

◆ 実践報告

1. 事業所概要

サービスの種類：居宅介護、生活介護、短期入所、児童デイサービス、計画相談

定員 20 名（生活介護）	事業所全利用者数 80 名	1 日平均利用者数 40 名程度
利用者平均年齢 20 代～30 代	障害支援区分平均 5～6	

コンサルティング参加職員：事業所職員 13 名

2. 研修に関するニーズ、相談内容（事業所の課題、職員の困りごとなど）

応募のきっかけ

事業所には様々なご利用者がおられます。その中で自閉症スペクトラム、あるいは発達障がいといった特性があるご利用者に対して、日頃の対応の中で難しさを感じている職員、あるいは、苦手意識を持っている職員もいる様に感じ、なにか全員で取り組める研修が無いかと模索していた所、このコンサルティング事業を見つけて応募することになりました。

事業所の課題

事業所全体を考えたときに、なかなか沢山の職員が共通の研修を受ける事がなく、自閉症スペクトラム、発達障がいといったテーマについて、事業所としての支援内容・対応等についてスキルや経験値が低いことは前々から感じていました。

この研修がきっかけとなり、苦手意識の克服や職員のスキルアップに繋がることを期待してスタートしました。

3. 職員研修の計画内容

テーマ

- ・ 発達障がい、自閉症スペクトラムの基本理解と支援について
- ・ 構造化とは

方法（講義のスタイル、人数と回数、研修後の業務への応用計画など）

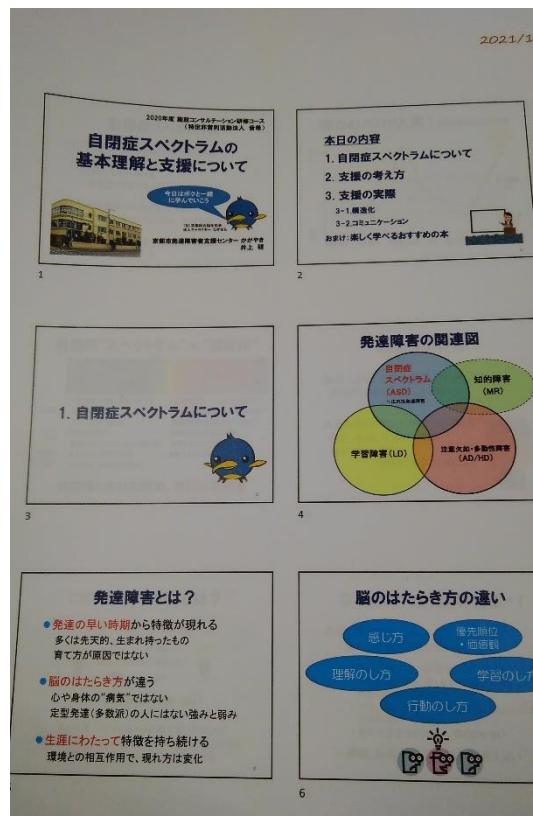
- ・ 講義形式の研修を、全 3 回実施（1 回につき参加者は 5～6 名程度）
- ・ 研修後は参加者に研修報告の提出を求める



研修の様子（受講者側より）



研修の様子（講師側より）



研修資料

4. どのような変化が生まれたか（事業所職員の理解・気づき、利用者の変化など） 考え方の変化が生まれる

今回の研修はまず、職員にとって、自分達の弱点を知れた研修だったと感じます。研修報告を読むと、冰山モデルの考え方から、表面に現れている行動には必ず意味がある事（特性）に、改めて気づきをもらえた研修となりました。ここから、それぞれのご利用者の特性について考える良いきっかけになった研修でした。



行動、発言の中からの変化の兆しが少しずつ

研修を実施以降、ご利用者支援（生活介護、居宅支援等）の中で、事業所職員からの発言や行動の変化が少しずつ見える様に感じました。ある新人職員は、ご利用者の特性への理解とアプローチ方法、あるいはコミュニケーションを考えるために、見えている事だけに主眼を置くのではなく、その方の資料を今一度見直して情報の洗い出しをしたり、職員同士で意見交換をしたりしています。新人研修においても、自分として今まで出来ていなかった考えや行動に気付く姿が見られ、変化が感じられます。



また、別の職員においては、実際にご利用者と関わる場面で、ご利用者の良い所、あるいは新たに発見した内容について、デイサービスの帰りの会など皆の前で発表する、あるいは褒める事を実践するようになりました。そこからご利用者の特性に

皆が気付いて、ご利用者との活動や過ごし方に対しての工夫や、新たな展開が見られるようになりました。まだまだ小さい変化ではありますが、こういった事の積み重ねが大きな変化や良い活動に繋がると信じています。

5. 今後の課題と展望

今後の課題としては、まず、何事においても継続性を持つことだと思います。

今回の研修においてもここで終わるのではなく、さらに継続性をもって取り組みをしたいと思います。例えば、どのご利用者の支援においても大切となる「アセスメント」においては、個々の職員のアセスメント能力はもちろんですが、事業所全体のスキルアップに事業所全体で取り組みたいです。

音希でもサービス等利用計画、個別支援計画等を、様々な支援者が立案・計画しています。そういった計画に携わる職員だけではなく、いずれ自分が関わる事もある、あるいは実習生や新人職員に対して教えることがあると捉えて、誰もが導入部分である「アセスメント」に対して向き合える環境や指導力を、事業所職員全員で切磋琢磨したいです。そのために、次年度は「アセスメントコース」に是非チャレンジしていきたいです。

また、すべてのご利用者に対して、支援者ひとり・事業所ひとつで担える事は限られています。一人で・一か所で抱えることは、現在のコロナ禍においてはあまりにもリスクが高い事であると思います。今後も続いていく状況、時代の流れに充分に対応できる事業所でなくてはなりません。そういったときに、どの関係機関、事業所さんと協力体制を整えるのか、どういった支援者チームを作るのが良いのかといった「ネットワーキングコース」にも、是非長期的にチャレンジしたいと考えています。横の繋がりを作る事、あるいは困った時にどういった支援体制を作るのかといった事を、事業所内の職員皆で考え、実践の組み立てを学んでいきたいです。

最後に、この研修に興味をお持ちの方、あるいは躊躇されている事業所の方へ

施設長 山崎兼介

私は、法人事業所の管理者という立場からこの研修に申し込みを行い、かがやきの施設コンサルティング事業担当者の方と複数回の打ち合わせや擦り合わせ、あるいはメール等のやり取りを行ってきました。

講義は3回の実施ではありましたが、この導入前の打ち合わせの部分だけを見ても、本当に丁寧に聞き取りや事業所の考え、管理者である私の考えに寄り添い、組み立てをして下さいました。言い換えれば、その事業所の考えに対してオーダーメイドの、カスタマイズした研修が展開できる事業です。これを是非に活用してもらいたいです。親切、丁寧な担当者の方がおられます。気軽に話や相談が出来る環境もお約束します。是非、ご活用下さい。一緒にご利用者支援に対して磨きをかけていきましょう。

(2021年3月)

デイサービスはあとの会（特定非営利活動法人 障がい者はあとの会）

〒606-8227 京都市左京区田中里ノ前町 80

TEL/FAX 075-722-7597



◆ 実施コース 研修コース

◆ 実践報告

1. 事業所概要

サービスの種類：生活介護事業

定員 20 名	現員 21 名	1 日平均利用者数 20 名
利用者平均年齢 28.5 歳	障害支援区分平均 5.90	

コンサルティング参加職員：17 名（管理者 1 名、主任 2 名、支援職員 14 名）

2. 研修に関するニーズ、相談内容（事業所の課題、職員の困りごとなど）

基礎から学びたい！ 実際の支援に役立てたい！

基礎的な知識を再度確認して、支援に重要なこと・個人の特性に合わせていくにはどうしたらいいか？ 発達障害の特性はわかっているけど、実際どういう風に支援を進めていくのがいいのか？ または自分たちの支援の仕方（構造化であったり、伝え方）は正しいのか？

様々な点から、改めて基礎から学び、実際の支援に役立てようと「研修コース」を申し込むこととなりました。

3. 職員研修の計画内容

テーマ

「自閉症スペクトラムの基本理解と支援のアイデア」

方法

- ・ パワーポイントを使用した講義
- ・ 研修回数 3 回（①8 名 ②5 名 ③4 名）約 1 時間半程度
- ・ 研修後に、事業所内の構造化や、課題設定の見直しを図る（利用者個人の特性に合わせて、よりわかりやすくする）。

4. どのような変化が生まれたか（事業所職員の理解・気づき、利用者の変化など）

自立課題について

今までの認識を改める機会となり、自立課題について「何を目的に（利用者さんに）やっていただいているのか？ 実用性なのか、自立度なのか、自信や意欲なのか、ご家族のニーズなのか？」など、様々

な観点から考える必要があることを再確認することができました。そして職員が集まり、自立課題の作成や「この利用者さんにこういった課題はどうか？」など話し合うきっかけになりました。参考書籍として紹介された「自閉症児・者のための自立課題アイデア集」（〔監修〕諏訪利明〔著〕林大輔、中央法規出版）を基に職員が話し合いながら作成するような学習会の提案もありましたが、これは新型コロナウイルス感染症対策のため見送ることとなっています。総じて職員自身が意欲的に変化したように思われます。

スケジュールの提示について

スケジュールを使うとしても、利用者さんがどれくらいの量の見通しが持てるか（次のひとつなのか、先のいくつかなのか、一日を通してなのか）、絵・写真カード以外の示し方（活動に関連する実物を見せるなど）のほうがいよいのか、理解できるスケジュールの長さを少しずつ延ばすにはどうしたらよいか、など、検討すべき点が多いことが分りました。研修を通して何かヒントに繋がるものがあればと思いましたが、実践につなげるにはなかなか難しいと感じています。

5. 今後の課題と展望

今回の研修を終えて職員からは、基本的な理解と重要な点等の再確認や相手（利用者）の視点からの考え方など、ためになることが多かったという意見が多数ありました。半面、まだまだ利用者個々に合わせた支援（基礎からの応用）がなかなか難しいという意見もありました。

自立課題作成のアイデアや選び方などはとても参考になったようで、意欲的に考えが進んでいるように感じますが、スケジュールの提示や利用者個々に合わせてわかりやすく伝えること（構造化）などはまだまだ解決した感じはなく、悩んでいる部分ではあります。但し「上手くいかない」＝「ダメ」とは考えずに、どこか工夫できるところはないか？ と前向きな姿勢を持つ職員も多数いました。

今後は、利用者の特性のアセスメントも並行して進めていきたいと考えています。

（2021 年 3 月）

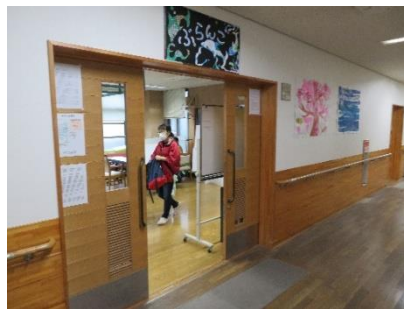
京都市山科障害者デイサービスセンター（社会福祉法人 京都障害者福祉センター）

〒607-8086 京都市山科区竹鼻四丁野町 34-1

山科合同福祉センター内 3 階

TEL 075-591-8843 FAX 075-591-8842

<https://www.normanet.ne.jp/~buranko/index.html>



◆ 実施コース アセスメントコース

◆ 実践報告

1. 事業所概要

サービスの種類：生活介護事業、計画相談

定員 20 名	現員 27 名	1 日平均利用者数 19 名
利用者平均年齢 37.8 歳	障害支援区分平均 5.5	

コンサルテーション参加職員：4 名（支援職員 4 名）

2. ケースの概要及び相談内容（対象者について、事業所の課題、職員の困りごとなど）

対象者に関して

対象者は 20 代後半男性で、自閉症、知的障害、強迫性障害、さらに進行性筋ジストロフィーであり、年々筋力が低下し（特に下肢）立ち座り・歩行動作に介助が必要。また日常的に不眠傾向があり、自宅で全く眠れないこともある。そのため日中は椅子に座った状態で傾眠の傾向がある。

施設コンサルテーション事業に申し込みをした経緯・課題に感じていたこと

①母の訴え

施設コンサルテーション事業が開始される前年度、母より自宅での夜間～朝までの対象者の様子について、連絡ノートを通して状況報告があった。夜間の不眠中に怒って大声を出すことや、耳の辺りをパンパンと叩く自傷行為、長時間のこだわり行動（対象者が様々な物の位置や角度を気にして位置を整えるため入浴を終えるのが深夜になる、バスタオルを何度も畳み直して時に朝まで続く等）が続いており、ご家庭の負担軽減のヒントを得る目的があった。

②一つひとつの行動に時間を要する

事業所では次の理由により、対象者が行動一つひとつを完結させるのにかなりの時間を要している状況だった。

- ・ 対象者を促してから、行動の開始・動き出すまでに時間が掛かる。
- ・ 物の位置や角度を何度も自分で触って調節する。
- ・ 行動を巻き戻し、進んでいた方向から逆に戻り直す。

そのため、例えばトイレに行き次の場所まで移動するのに 20～30 分程かかる。こうした行動が、必ずしも対象者にとって心地よいことではないのは理解していた。時に行動が中々完結できずストレスをためてしまっているとも感じる。その負担をできるだけ軽減できるような方法を検討したかった。

③食事のメニュー表を見て選ぶ

対象者が食べたいものを、メニュー表を示しても選ばないので、自分で選べる方法が知りたかった。

3. アセスメントから得られた情報と、それに基づく取り組み内容

アセスメントからわかったこと

強み・得意なこと	弱み・苦手なこと
・ 見てやり方がわかることはしようとする。 ・ 実物による指示がわかりやすい。 ・ はっきりと違う色や形の区別ができる。 ・ くり返し経験してどうしたらよいかわかったことは自分から行動に移しやすい。 ・ 重ねる、真っ直ぐに置く等、物をきっちり扱う。 ・ 好きな感覚刺激があり、動機づけとして活かしていける可能性がある。	・ することがわからない、示されていないと、周囲の見える物に注意がそれやすくなる。周囲の物を触ったり、位置を気にしたりする。 ・ 口頭、身振り、絵の指示は分かりにくい。 ・ 自分から行動を始めることがしにくく、指示や促しを待つ形になりやすい。 ・ わからないことへの精神的負担が大きい。下を向き、身を固くしている。 ・ わからない時、困っている時に、相手に伝わるように気持ちを表す手段がなく、表情からも気持ちが判断しにくいいため、困っていることが周囲に伝わりにくい。
感覚の特性など	
・ 聴覚の刺激に気づきにくい。職員の口頭の指示など反応しにくい（理解しにくい）。 ・ 好きな感覚があり、その感覚（特に視覚）を追求する。 ・ 苦手な感覚（口頭などで説明を受け、十分理解できないこと）に関して回避しようとする。	

アセスメントにもとづく取り組みの計画、具体的内容

ターゲットとする行動	場面	方法、手順
帰宅前の準備で可能な限りのスムーズな移動（トイレ～送迎車への乗り込み）	帰宅前の送迎車内（出発まで待機している時間帯）	車内床や対象者の前方（前席部）に LED ライトを設置し、視覚的な楽しみを提供する。
食事の選択（食べたいもの一方を自発的に示す）	昼食開始前（食席に着いた状態）	現物の異なる食事 2 品を、席に着いた対象者と職員の前に用意したお盆に乗せるジェスチャーで示す。対象者と職員、どちらかが

		一方を取る仕組みを理解してもらう。
--	--	-------------------



普段の移動の様子（帰宅前のトイレへ移動中）



帰宅前の送迎車内。地下駐車場内であるため、薄暗い空間。対象者は暗い空間が得意ではない



小さな写真のメニュー表で選ぶことはしないため、大きな写真での食事選択を試みている場面。この時も写真に注意が向かず（あまり反応することなく）、選ばなかった

4. どのような変化が生まれたか（事業所職員の理解・気づき、対象者の変化など）

こだわりに対しての見方

普段から、こだわりと見なしている行動の原因と考えられるのが、苦手を回避することと、好きなことへの追求の2つの作用からなっているということは新しい知見であり、納得がいくものだった。アセスメントや感覚プロファイルの結果に基づいて見てみると、昼食前よりも帰宅前の移動に特に時間が掛かると感じていたのは、帰宅前には昼食前よりも本人の楽しみは少なく、苦手は多いからと思われた。

対象者の行動の様子を観察するようになり、移動の場面で気が散っている様子であったり、いつもと違う場所へ行こうとしたり、違う物へのこだわりを見せた際には、「これは回避にあたる行動ではないか？」という視点をもつようになった。また、対象者の好きな感覚や遊びは既知のもの以外にもあることがわかった。

帰宅前のスムーズな移動を目指して、本人の好きなアイテム探しや、車中で楽しむ工夫を考案しているが、今のところ大きな変化は見られていない。



薄暗い送迎車内に設置したLED ライトを眺める様子

本人の特性に関して

聴覚の情報刺激に気づきにくいという本人の特性を考慮し、移動の際に話しかけを少なくしている。その場合、対象者のストレスは少ないように見受けられる。

「くり返し経験してどうしたらよいかわかったことは自分から行動に移しやすい」という結果から、あまり機会がない外出の前は大きめ（A4 サイズ）の車の写真や、移動を示す車いすの現物を本人の前に持ってくることで理解してもらうようにした。対象者は外出を好むため、移動は比較的スムーズに行える。

絵等の視覚的刺激には気づきにくい結果が出て、今までメニュー表を見ても反応しなかった事を考えると、恐らく写真でも 2 次元的なものは気づきにくいと思われる。しかし「くり返し経験してどうしたらよいかわかったことは自分から行動に移しやすい」という対象者の強みを考え、食事は現物の選択（2 択）から始め、慣れてきたら大きな写真で 2 択に挑戦していく。

現物の食事 2 択は本人の好物と苦手なものから始め、現在は対象者がどちらか迷う様なメニューにしているが、毎回選ぶことができていく。次の段階では現物の写真を用意して選択してもらう。



現物の食事でどちらか一方を選び、対象者が選ばなかった方は職員のものになることを、視覚的に分かりやすくしてみた。

5. 今後の課題と展望

今後も引き続き、アセスメント結果の全体共有と、職員全体で対象者の支援方法を検討する機会を設けなければならない。日中は事業所で、できるだけ対象者の苦手や負担に感じることを少なく、過ごしてもらうことを続けていく。

また施設コンサルティング事業を通して、対象者の様子をよく観察するようになり、少しずつではあるが気づきや発見もある。対象者に関して、知らなかった事が今後出てくると思われる。それらの情報を含め、対象者のアセスメントをより深く正確なものにしていく必要があると感じた。

（2021 年 5 月）

七彩の風（社会福祉法人 幸の会）

〒601 - 1121 京都市左京区静市静原町 1144

TEL 075-705-6123 FAX 075-705-6124

<https://nanaironokaze.jp/>



◆ 実施コース アセスメントコース

◆ 実践報告

1. 事業所概要

サービスの種類：生活介護事業

定員 35 名	現員 33 名	1 日平均利用者数 約 26 名
利用者平均年齢 36.6 歳	障害支援区分平均 5.3	

コンサルティング参加職員：5 名

2. ケースの概要及び相談内容（対象者について、事業所の課題、職員の困りごとなど）

他害、自傷、物の破損について

- ・落ちつかず、不安定時に近くに居る人を叩く、自身の着ている服を破く、物を壊す、座って固まり尿失禁するまで動けなくなることがある。
- ・これまでに朝の送迎車内で、落ち着かず運転手を叩く事があった。七彩の風到着後、送迎車内の日よけを助手席、運転席側の計 2 つ取ることがあった。その後更衣室でタンクトップを破ることがあった。

一度記憶した事は忘れにくく繰り返し返答を求める

- ・一度記憶したことは忘れにくく繰り返し同じ返答を求める。落ち着かない時は大きな声で不適切な発言（ボケ、死ね、うんち等）を繰り返すことがある。

職員全体の支援力の向上

- ・職員 10 名と職員体制が整いつつあるが、未経験者、福祉職歴 5 年未満の者が 7 名と半数を占めている。（2020 年 8 月時点）
- ・今後、検討することや課題が出来た時に皆で向き合える体制を作っていきたい。職員一人ひとりが知識や考える力を身に付ける事でより良い支援に繋がってほしい。

3. アセスメントから得られた情報と、それに基づく取り組み内容

アセスメントからわかったこと

強み・得意なこと	弱み・苦手なこと
・「なくなったら終わり」が分かる。 ・実物の見本を見てその通りに取り組む事ができる。 ・やり方が分かると、繰り返し取り組む事ができる。 ・道具は丁寧に扱う事ができる。 ・課題は短い期間で達成できるものだと、次々と取り組むモチベーションを維持しやすい。	・口頭での指示を聞いて正確に理解する事が難しい。 ・コントラストがはっきりしてないものは見落としやすい。 ・視野の範囲を外れたものへの注目が弱い。 （左側は見落としやすいのでは。） ・要求や拒否を人に伝えるための適切な手段を持っていない。 →評価場面では自発的な表出がなく、要求や拒否などが相手に伝わりにくい。 →日常場面では、自傷や物の破壊といった手段で要求や拒否を表す。
感覚の特性など	
・評価中、音楽が聞こえたり、部屋への人の出入りがあったりしても少し横を向く程度で、すぐに今行っている活動に戻ることが出来た。 ・指のささくれが目に入ると課題の途中でも指を触る。 ・作業途中、検査者が中断しても作業の再開は出来るが、中断前までのやり方とは違う方法で取り組む。指示を覚え続けている事が苦手な可能性がある。	

アセスメントにもとづく取り組みの計画、具体的内容

ターゲットとする行動	場面	方法、手順
① 活動時、また空いた時間、落ち着いて過ごす。	A 午前の外作業時、落ち着いて作業に取り組む。	・スケジュール表を作成。 ・絵カードは作業ごと、場面ごとに作成。 ・1日の流れの見通しを持てるようにする。 ・言語指示を最小限に控え、スケジュール表の指差しなどして伝える。
	B 作業の無い時間（午前の作業終わり、帰る時間前）落ち着いて過ごす。	・自立課題を作成。 ・スケジュール表に行う自立課題の写真を貼り見通しを持てるようにする。
② 午前作業後の更衣時、更衣室で固まり時間を要する事がある。	スムーズに更衣を行いたい。	・更衣室にスケジュール表を掲示。 ・タイムタイマーを使用し、時間内に更衣を行う様に声かけ。

①について

- ・ スケジュール表作成に関して、写真を使用した絵カードを作成した。トイレのカードはトイレの扉が閉まっている状態でトイレのマークも映るように作成をしたが、本人は理解しにくい様子であった。そのため本人の動線、見えている角度を意識し、トイレの扉を開け便器が写っているカードに作り直すと、理解する事ができたようでスムーズに行動できていた。
- ・ アセスメントの結果を元に袋にティーパックを入れる自立課題を行った。袋にきっちり収まることを好むようで集中して取り組んだ。しばらくしてから 15 袋から徐々に 30 袋に増やしたが、拒むことなく集中して取り組んでいる。

②について

- ・ 午前の作業終わりの更衣に 30 分～50 分要する事が多い。
- ・ 更衣後の流れの見通しを持てるようスケジュール表の掲示を行った。スケジュールの確認はするが更衣室で固まることは続いたため、アセスメント時に認識していたタイムタイマーを使用する。タイムタイマーの写真もスケジュール表に付け足し掲示。タイムタイマーを 30 分でセットし、手渡すと 20 分ほどで更衣を終え作業室に戻ることができた。

4. どのような変化が生まれたか（事業所職員の理解・気づき、対象者の変化など）

支援の方法の変化

アセスメントの結果から、言語指示より視覚的情報の方が理解しやすいということが分かり、スケジュール表の作成を行った。本人に関わる時は、言葉かけを減らし、スケジュール表の写真カードを示して次の指示を伝えた。また、本人自ら動きだすのを待つようにした。動くのに時間を要しそうな時は再度写真カードを示し促した。このような関わり方のポイントを、担当者に限らず、生活介護の職員皆で共有したところ、本人が作業に落ち着いて参加できることが増えた。また尿失禁や服を破ることが減少した。

スケジュール表の変更

全体の作業の流れとスケジュール表のタイミングが合わず、スケジュール表の流れの変更を行った。本人の見えないところで変更を行い、再提示を行った際、不安定になることがあった。それ以降スケジュール表の変更は本人の前で行うことになったが、予定の変更を行っても、落ち着いて参加出来ることが増えた。

自立課題への取り組み

これまで「午前の作業終わってから昼食前まで」と「帰りの準備をしてから送迎車へ乗車するまで」の時間に手持無沙汰になり不安定になることが多かった。アセスメント時、課題など集中して取り組むことができていた様子からヒントを得て、その時間に自立課題に取り組むことになった。自立課題を実施してからは落ち着いて過ごすことが増えた。

職員全体の支援力の向上

今回のコース実施にあたり、事業所内での研修や外部研修を実施した。また、担当職員以外にもコンサルテーションのミーティングに参加し、本人や支援方法への理解を深めた。また、職員間で支援方法の確認や支援手順の統一を図ることで、本人の変化を職員で共有できたこともあり、支援力向上へと繋がった。

5. 今後の課題と展望

今回施設コンサルテーション事業を利用し、本人に大きな変化があった。そのため、今後劇的な変化は少ないかもしれない。その時に支援のマンネリ化や支援のモチベーション低下が起きないように、日々記録をとり、長い期間で見たら変化が分かるように取り組んでいきたい。また、取り組みは 1 つずつ、焦らず行っていき、支援に悩んだ時は、冰山モデルや ABC 分析を用い、支援について職員間で考えていきたい。

今回、対象者本人への支援方法や理解は深まったが、他の利用者へは十分に生かされていない。七彩の風の利用者で、言語指示より視覚的情報が理解しやすい方は多いように思う。今回学んだ事を活かし、一人ひとりに合った支援方法を探していきたい。

また、今回の本人への詳細な支援方法は一部での共有に留まっている面もあるため、生活介護職員全体で、本人、並びに他の利用者の支援方法について検討する機会を職員会議などで持っていく。そのためにも知識を増やすこと、観る目を養うことを大切に、支援力のさらなる向上を目指していきたい。

（2020 年 5 月）

七彩の風（社会福祉法人 幸の会）

〒601-1121 京都市左京区静市静原町 1144

TEL 075-705-6123 FAX 075-705-6124

<https://nanaironokaze.jp/>

◆ 実施コース アセスメントコース（フォローアップ）

◆ 実践報告

1. フォローアップを受けるにあたっての課題と展望

お茶などの要求が本当に欲して発言しているのか、以前に職員と行った会話のキャッチボールの返答を求めているのか分からず職員が困惑し、本人に不安感を与えてしまっているのではと感じることがある。本人の訴えを取りこぼさないように、言葉以外での意思表示方法を職員が学び、実践することで本人がストレスを感じることを減らし、過ごしやすい環境作りを行っていきたい。

2. アセスメントコース終了後の取り組み内容

取り組みの計画、具体的内容

ターゲットとする行動	場面	方法、手順
お茶の要求を訴えているのか職員との会話のキャッチボールを求めているのか把握する。	スケジュール以外のお茶の要求時。	したいカード、欲しいカードを机に置きお茶が欲しい時はカードを職員に渡す。

3. どのような変化が生まれたか（事業所職員の理解・気づき、対象者の変化など）

お茶の要求

スケジュール外のお茶の要求時、言葉だけでなくお茶カードも職員に渡すように伝え、カードも持って来た時には水筒にお茶を入れ渡すように行った。毎回スケジュール外のお茶の要求を行うこともなく、また対応職員によってスケジュール外のお茶の要求をすることもあれば、しないこともあったので、お茶の要求時にはカードを渡すことが浸透しきらなかった。特定の職員には、カードを渡しお茶の要求を訴えている姿が見られるが、本当にお茶を欲しての要求なのか、会話のキャッチボールを行いたかったからか分からない。

不安定時に作業室に戻るカード

屋外作業中に不安定な様子になり、言語指示で作業を続けるか館内に戻るか問うと、館内にも戻らず作業も行わずその場から動かない時に、館内の椅子（作業室に戻る）カードと続きの屋外作業カードを提示すると館内の椅子カードを選択し、館内に戻ることが出来ることがあった。

不安定時には言語指示が多いと刺激となり本人がよりしんどくなること、できる限り言語指示は減ら

し絵カードやジェスチャー等視覚的情報を用いて伝えた方が理解されやすい事が分かった。

4. 今後の課題と展望

- ・ スケジュール表を作成しスケジュール表の予定通り行動しているが、本人からの思いが聞き取りにくく職員の思いを伝えるだけで負担を感じストレスに感じているのではないかと思う。本人の思いを受け取るためにも思いを発信できる手段を取り入れ、職員間でも差がなく実施できるよう行っていきたい。
- ・ 本人の思い通りになった時、上手くいかなかった時の様子を記録にして、まとめていく事で、職員間の情報共有できるように活用していきたい。それ以外にも、支援に関する研修を受講し課題となっている部分を（研修で学んだことを）取り入れていきたいと考えている。
- ・ 課題が解決できない場合は、ネットワーキングコースを利用して解決策を図っていきたい。
- ・ 手持無沙汰の時間に自立課題に取り組むようになり、不安定になることが減ったように思う。本人も達成感を感じているようで、好みの自立課題は連日選択して取り組んでいる。今後も本人が好むような自立課題の作成を行っていきたい。
- ・ また、他の利用者支援について、利用者の作業と作業の合間の時間や休憩時間にできることを各職員が考え、実践することが増えてきた。今後は利用者それぞれにあった自立課題ができるよう、各担当職員と一緒にアセスメントをしっかりと行い、実践していく。

最後にこの施設コンサルティング事業を活用させていただき、多くのことを学ぶことができた。普段の業務に加え、この事業についての資料作成や打合せがあり大変な面もあったが、対象者の方を深く知ることができ、職員の育成に繋がられるきっかけになったことは良かったと考えている。

（2021 年 10 月）